

北京



名称史話

—大通りから胡同まで／地名
にみる北京の歴史

(改訂版)

張清常 著

北京語言大學出版社



S. S. IT 株式会社

北

風



名稱史話

（一）

（二）

（三）

（四）

北京「街巷」名称史話

—大通りから胡同まで～地名にみる北京の歴史

(改訂版)

張清常 著

張曉華 原稿整理

山口葉子 訳



北京语言大学出版社
BEIJING LANGUAGE AND CULTURE
UNIVERSITY PRESS

S.S.IT株式会社

图书在版编目(CIP)数据

北京街巷名称史话: 日文版 / 张清常著.

— 北京: 北京语言大学出版社, 2012.10

ISBN 978-7-5619-3374-9

I. ①北… II. ①张… III. ①地名—研究—北京—日文

IV. ①K921

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2012) 第 222033 号

书 名: 北京街巷名称史话 (修订本)(日文版)

责任印制: 姜正周

出版发行: 北京语言大学出版社

S.S.IT 株式会社

社 址: 北京市海淀区学院路 15 号

日本大阪市西区北堀江 1-1-3

邮政编码: 100083

550-0014

电 话: 发行部 0086-010-82303650 / 3591

0081-6534-8299

编辑部 0086-010-82303647 / 3592

读者服务部 0086-010-82303653

网上订购电话 0086-010-82303668

客户服务信箱 service@blcup.com

网 址: www.blcup.com

印 刷: 北京中科印刷有限公司

经 销: 全国新华书店

版 次: 2012 年 11 月第 1 版 2012 年 11 月第 1 次印刷

开 本: 787 毫米 × 1092 毫米 1/16 印张: 29.75 插页: 3

字 数: 621 千字

书 号: ISBN 978-7-5619-3374-9 / H · 12161

定 价: 82.00 元

第一章 北京这个名称的来历及变化

第一节 北京这个名称

1.1 现在全世界瞩目的北京，全称北京市，简称京，是指北纬 $39^{\circ}28'$ ~ $41^{\circ}05'$ ，东经 $115^{\circ}25'$ ~ $117^{\circ}35'$ 这一块土地。它是中华人民共和国的首都，为中央直辖市。

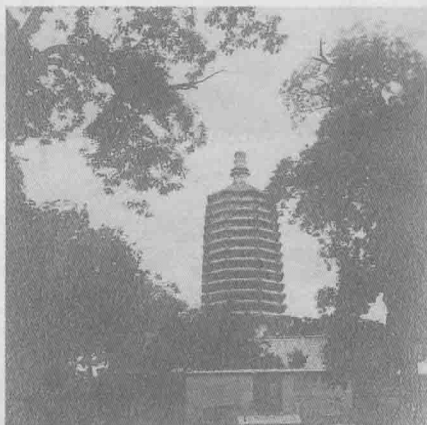
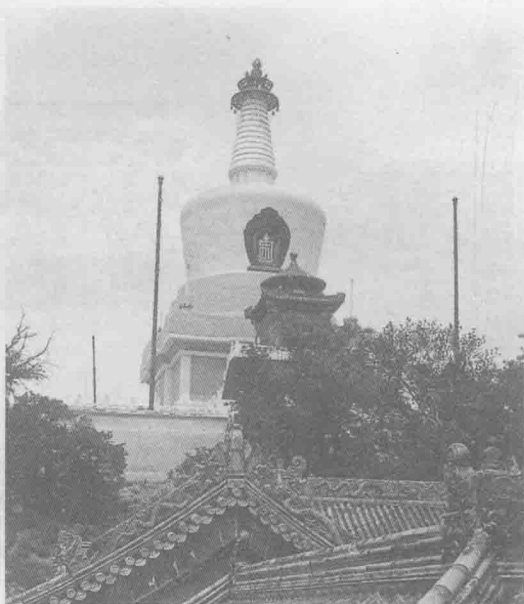
北京虽能写成两个字，却是一个词。因为它是有所手指的，它是个专用名词。

1.1.1 北和京这两个字在商朝（约当公元前16世纪至公元前11世纪）甲骨文里面就有了。北写作  原是象两人背对背。照当时卜辞文句中使用的意义已经是指方向。东南西北是四个主要的方向，北就是清早面对太阳那时候的左手的那一边。京写作  原是象古代高层楼台之形。《说文》：“京，人所为绝高丘也。”《史记·仓公传》把高大的谷仓也叫京。有人说甲骨中有京是地名，恐不可信存疑。

卜辞及西周铭文

北京旧照





まえがき

出版にあたって

本書は『北京街巷名称史話——社会言語学的再探索』（北京語言大学出版社、1997年）と題する原書がもとになっている。原書には外編12編を掲載しているが、改訂を期に全て削除し、12編の中から中国語の「胡同」という言葉の由来などについて論じた文章をまとめ、『胡同及びその他』増訂本として出版した。その他の部分は、原書の編集上の誤りを修正したほかは、ほぼ原状を保っている。

今回の改訂にあたっては、80枚余りの挿絵を付け加えた。本文中の写真は張曉華氏の撮影によるもので、冒頭の「北京旧照」は著者が所蔵する昔の写真である。

また、読者のみなさまが元大都、明・清北京の街巷の全体像を把握できるよう、改訂に際して3枚の地図を附録として作成した。この3枚はいずれも侯仁之氏主編『北京歴史地図集』（北京出版社、1988年）が基になっており、ここに謹んで感謝の意を表する。

北京語言大学出版社

編集部

まえがき

近年の北京の変化は、実に大きく、多岐にわたり、そして速い。

道路の敷設を例にとると、13 世紀の中頃、元朝の大都新城の建設に際して南北の中軸線が定まり、街と街、街と中軸線が直角に交わり、或いは平行に並んで碁盤目状の構造が完成した。これが中国の伝統として受け継がれ、北京城区は今でもこのスタイルを基盤に成り立っている。1930 年代に旧「内城」には、内環の雛型となるバス路線が登場した。中華人民共和国建国以降、1950 年代には南北中軸線が延長され、さらには天安門広場を中心とする東西軸線が形成された。この線は、東は通県から西は石景山まで、全長 40 キロメートルに及ぶ。1980 年代には地下鉄 2 路線が開通し、地上では二環路、三環路が建設され、目下四環路が建設中となっている。これと同時進行で、9 本の放射状の幹線道及び 14 本の放射状の次幹道、さらには高速道路及び五十六本の長距離道路が建設されている。新中国成立 40 年余りの間に、道路敷設の分野のみとはいえ碁盤目式の構造から脱却し、環状線状、放射線状の道路が登場することになるろうとは、元、明、清、民国の 700 年に及ぶ統治時期には、達成はおろか、想像すらできないことであった。ここ 40 年余りの間に行われた近郊区の街巷の補修、遠郊県や村の道路状況の改善にいたっては、それ以上にすばらしい成果を上げている。

高まる気持ちを抱きながら、私は愛する北京のために北京研究の力になれないかと考えた。よくよく考えてみると、都市には区や鎮があり、街巷や地点がある。それらには必ず何らかの名前がついている。私は北京街巷地点の名称の意味、言語構造、命名及び改名といった複雑な現象について探求し、何かしらの発見を得ようと力を尽くした。僅かでも納得のいく道理が得られ、それがどこかで誰かの参考になれば、非常に光栄なことである。

本書では次の 3 点の試みを行った。一、明朝の張爵『京師五城坊巷胡同集』に注釈を加えた。機械的で単純な作業は賢人の為す所ではないからである。二、論文を執筆し、北京街巷名称の資料に基づき、中国語そのものの問題を追及した。三、雑談をまとめて出版した『胡同及びその他』の後を、本書が引きついだ。

雑談は自由で柔軟性があるかわりに、コントロールが難しい。私は次の2つの角度から考察を行った。

第一に、『胡同及びその他』で用いた社会言語学的アプローチを継続した。北京について語る時、重点は城区におき、とりわけこの地域において異なる時代、異なる居住区、更には年齢、社会的地位、職業、本籍が異なる人の、北京街巷名称に対する反応や、与えた影響に注意を払った。地名学の有益な成果を参照したほか、特に言語と歴史、地理、民族、文化などとの関係にも注目した。その目的はやはり、中国においていかに社会言語学研究を深めていくかを探求することにある。

第二に、北京街巷名称史話の性格に基づき本書を執筆した。現代に立脚し、参考資料の下限は1989年末として、そこから時代を遡っていった。こうすることで遼・金・元の街巷名称及び関連する問題の論証を比較的多く行うことができ、明代の北京街巷名称について比較的多く語ることができる。前清及び民国の街巷名称に関しては、変遷を追うだけとなった。ともかく目的は、過去の北京の街巷名称をざっと見渡し、大まかに集計することであり、それ以上ではない。

様々な原因から度々筆を置くことがあり、3-4年の年月を経たため、心境の変化も多く、考えが浮かんで消え、論述のスタイルや文体もその影響を受けた。その点でいうと、中編の漫談は同じ位の字数がある古典籍の注釈本や、複数の論文を書くことより難易度が高く、強靱さと高ぶる衝動をもって一気に書き上げる必要がある。私にはその忍耐力が欠けていたようである。

そんな私を叱咤激励し、資料集めや統計作業を手伝ってくれた家人に感謝する。またいつも気にかけて、励ましてくれた友人達にも感謝している。

本書出版に際して様々な便宜を図ってくださった出版社の方々、そして編集担当の施光亨氏*にも感謝申し上げる。施氏は本稿に多くの精神と時間を割き、責任感と豊富なアイディアで私を助け、転寝や誤魔化しに逃げがちな私に、発破を掛けてくださった。

作者、八十一歳と三カ月

* 1997年第1版の編集担当。

目次

第一章 北京の名称の由来と変化	1
第一節 北京という名前	1
第二節 「北京」は昔、今の北京市を指さなかった	7
第三節 北京の地は昔、北京と呼ばれなかった	11
第四節 北京の別名	21
第二章 北京の区県名の由来と変遷	32
第一節 北京の管轄区域の総称	32
第二節 北京市城区の名称	35
第三節 北京市近遠郊区及び県の名称	54
第三章 北京街巷名称の言語構造	61
第一節 北京街巷名称における通名	61
第二節 北京街巷名称における特殊な言語現象	69
第三節 北京街巷名称の言語構造方式	83
第四章 北京の地物名称の命名	109
第一節 天然地物の名称	109
第二節 人工地物の名称	127
第五章 遼金元における北京街巷の命名	159
第一節 遼金	162

第二節 元	177
附図 1 遼南京の外郭略図	233
附図 2 金中都の外郭略図	235
附図 3 元大都の外郭、水路、大街略図	236
附図 4 元大都の地名略図	238
 第六章 明清における北京街巷の命名	239
第一節 明	240
第二節 清	330
附図 5 明北京(北平)城垣の発展略図	355
附図 6 明嘉靖北京の五城三十六坊略図	356
附図 7 清初の内城八旗・外城五城略図	357
附図 8 清乾隆から光緒までの北京内外城各五城略図	358
附図 9 清末の内外城二十区略図	359
 第七章 近現代における北京街巷名称の命名	360
第一節 近代(1912 - 1949)	360
第二節 現代(1949 年から現在まで)	389
附図 10 近代(1929 - 1949)の北京市内外城十一区略図	411
 第八章 北京街巷名称の変化	412
 第九章 北京街巷数の発展に関する古今概略	448
 附録	
元大都 至正年間(1341 年 - 1368 年)	
明北京城 万暦から崇禎年間(1573 年 - 1644 年)	
清北京城 乾隆十五年(1750 年)	



第一章 北京の名称の由来と変化

第一節 北京という名前

1.1 今や世界から注目される都市となった北京は、全称を北京市、略称を京といい、北緯 $39^{\circ}28'$ — $41^{\circ}05'$ 、東経 $115^{\circ}25'$ — $117^{\circ}35'$ の土地を指す。中華人民共和国の首都であり、中央直轄市でもある。

「北京」と2文字で表記されるが、これは1つの単語である。ある特定の意味を持つ、固有名詞である。

1.1.1 「北」と「京」、この2文字は商代(およそ紀元前16世紀~紀元前11世紀)の甲骨文に見られる。「北」は「𠂔」と書かれ、二人の人間が背を向けて立つ様子を象ったものである。当時の卜辞での使われ方からして、すでに方向を指していたと思われる。東西南北は主な方角だが、北は朝太陽が昇る方角に向かって左手にあると捉えられていた。甲骨文で「京」は「𡩉」と書かれ、古代の高層の建物の形が象られたものである。『説文解字』では「京は人の為る所の絶だ高き丘なり」と説明され、『史記・倉公伝』では高大な穀物倉庫も「京」と呼ばれている。卜辞や西周の青銅器銘文や甲骨文にも「京」があり、これを地名とする説もあるが、これは疑問である。

「北」と「京」の2文字は、2つの単語であり、2つの普通名詞であって、固有名詞ではない。

1.1.2 「京」という字の本来の意味が大きな建築物であるからだろうか、この字はかなり早くから固有名詞に変わっていった。2つの状況が挙げられ、一つは地名となったもの、もう一つは「京」と別の字が組み合わされて地名となったも



のである。

1.1.2.1 西周(紀元前11世紀～紀元前771)時代の文献には「京」を単独で地名とする用法は見られない。東周(紀元前770～紀元前256)には古邑の名前に「京」がある。春秋時代の鄭の国の地方である。『春秋左氏伝・隠公元年』(紀元前722)の記載によれば、鄭伯の弟が京に住んでいた。場所は現在の河南省滎陽県の東南で、秦代に県が置かれた。紀元前205年に、楚の霸王・項羽と漢王・劉邦が京、索の間で戦ったのが、この京県であった。皮黄劇*『守滎陽』(別名『焚紀信』)で演じられるのがこの物語だ。北斉(550—577)に至り、京県は廃止された。この他にもう一つの京があり、現在の江蘇省鎮江市に当たる。呉を治めた孫権は209年から211年にかけて、行政の中心機関を呉(現在の蘇州市)から京へ移転させ、京城と呼んだ。後に建業(南京)に首都を建設し、京城は京口県と改名された。その後東晋及び南朝(317—518)にかけて、京は京口と通称された。南宋の辛棄疾が1205年に作った『永遇楽』にある、「京口北固亭懷古」という詞の出だし「千古江山、英雄無覓、孫仲謀處」は、後世に詠い継がれている。

1.1.2.2 「京」と別の字を組み合わせて地名にする例は枚挙に暇がない。主に3つのケースに分けられる。

一つ目は、元の地名が本来一文字であり、そこに「京」を加えても加えなくても、その場所を指すものである。京を加える理由は、詩文のリズム感であったり、意味の上で国の首都であることを表すためであったりする。後者の理由により、「京」は普通の大型建築物から都市に、更には国の首都の同意語へと次第に変化していった。『詩経・大雅・文王有声』に「考トは維れ王、鎬京の辟雍」とある。西周の都は鎬といい、宗周、西都、鎬京とも呼ばれた。この地は現在の陝西省西安市西南部に当たる。漢代には、班固(32—92)『東都賦』に「子は徒らに秦阿房の天に造るを習いて、京洛の制有るを知らざるなり」と記されている。「洛」は中国の古都の一つ、洛陽を指す。西周時代には洛邑と呼ばれ、東周時代は国都であった。戦国時代より洛陽と呼ばれるようになり、秦代に県が置かれ、後漢には国都

* 京劇



であった。班固はここでは洛と略称し、前に京を付けてこれが国都であることを示している。その後唐代は長安に都が置かれ、洛陽は副都となり東京と呼ばれた。このため唐代の人は、洛と略称して後ろに「京」を付け、洛京と別称することもある。しかし実際のところ鎬京、京洛、洛京は政治上の正式名称ではない。「京」字が単独使用される時は、国の首都、天子がいる場所という意味になる。例えば『詩経・大雅・文王』に“裸(guàn、天子が酒を以て祖先を祭る)将于京”とあり、『詩経・曹風・下泉』に「念彼京周(京周は周の京を意味し、目的語の“周”は“京”の後ろに置き協韻させる。前の一節は「念彼周京」であり、比較できる)」となっている。現代の字引等では、鎬京、京洛、京周に地名記号を付けているものがみられるが、必ずしも適切ではない。

二つ目は「京」を国の首都の意味とし、後ろに文字を加えて地名とするもので、しかもそれを正式名称とする類である。例えば漢代に京兆という郡名があった。また辛亥革命後には「京兆地方」という行政区画名があり、管轄者を京兆尹、管轄区域を京兆尹といった。さらに唐代の行政区画は15道に分かれていたが、そのうちの 하나가京畿道であった。宋代には道が路に変わり、15路の中には京東路、京西路があった。また「京師」の2字を合わせて使用し首都を意味した。これは複合語であり、明確に特定の地方を指すものではない。『詩経・大雅・公劉』の「京師之野」が指すのは陝西にある国都であり、『春秋公羊伝・桓公九年』の「京師たるものは何ぞや。天子の居なり」とは東周の国都・洛邑を指す。単に「我が国都の原野で」という時の「京師」は、地名とすることはできないだろう。明朝の洪武年間に至り、応天府に都を建設した。現在の南京市である。京師は行政区画の名前で、管轄区は現在の江蘇、安徽、上海の2省1市に相当する。永楽十九(1421)年に現在の北京市がある順天府に遷都した。京師の管轄区は現在の北京、天津両市と河北省の大部分の地域に相当する。こうして明朝の京師は確固たる地名となった。清朝においてもこれが踏襲され、管轄区を指すと同時に北京自体をも指すようになった。後に京城、京門、京華なども首都の意味を持つようになるが、ここでは省略する。

三つ目は「京」の字が国の首都の意味を持ちながらも、当時の政治、経済、軍事



といった各方面の必要から、首都以外に設けられた副都に用いられるケースである。国都は一つとは限らず、主なものを「首」、次に続くものを「陪」とした。これでは明確さに欠けるので、区別のために「京」の字の前に方角(東西南北)や方向(上や中。下は使わない)を加えた。長く使われ続けると影響力が高まり、「×京」という名称が正式な地名となっていく。ここでいう「×京」が正式な地名となった、とは政治上国家が正式に命名したことを指し、民間の呼び名ではないということに注意していただきたい。漢代には前漢が長安に建都し、前漢の滅亡後には後漢が洛陽に建都した。後漢の人々は旧都の長安を西京と呼び、当時の国都・洛陽を東京と呼んだ。張衡(78—139)の『二京賦』はまさにこの東西の京の勇壮偉大な情景を描写したものである。東京、西京という名称は国家が定めた正式名称ではない。唐代になると長安が首都となり、陪都として東京(初めは隋制に従い東都と言った)洛陽、西京鳳翔府が置かれたが、この東京、西京は国家が正式に命名したものである。中国の歴史に登場する正式な「×京」としては以下のものがある。

北周 東京洛陽。

隋 東京洛陽。

唐 東京洛陽、西京鳳翔府、南京成都府、南京江陵府。

後唐 東京興唐府、西京太原府(後に北京太原に変更した。現在の山西省太原市西南の晋源鎮)、西京長安、北京太原。

後晋 東京開封府、西京河南府、北京太原府。

後漢 東京開封府、西京河南府、北京太原府。

後周 東京開封府、西京河南府。

渤海 上京龍泉府(現在の黒竜江省寧安市西南)、東京龍源府(現在の吉林省琿春市)、西京鴨渌府(現在の吉林省集安市東北)、南京南海府(現在の朝鮮咸興)、中京顕徳府(現在の吉林省敦化市)。

北宋 東京開封府、西京河南府、北京大名府、南京応天府。

遼 上京臨潢府(現在の内モンゴル自治区バイリン左旗)、東京遼陽府、西京



大同府、南京析津府（現在の北京市）。

西夏 中京大定府（現在の内モンゴル自治区寧城県）。

金 上京会寧府、東京遼陽府、西京大同府、北京大定府、南京開封府。

明 南京応天府（現在の南京市）、北京開封府（現在の河南省開封市）（この名称は洪武元年から十一年、1368 - 1378 年にのみ存在）、北京順天府（現在の北京市）。

清 京師順天府。

付け加えて言うと、清朝の国都の正式名称は京師順天府、陪都は留都盛京（現在の遼寧省瀋陽市）である。清末の光緒二十四年（1898）に創設された新たな形式の国立大学は京師大学堂と名付けられ、これは北京大学と北京師範大学の前身である。京師大学堂という名称が、清朝の国都の正式名が北京ではなく京師であったことを証明している。清朝は権力が揺らぎ終焉が近づいてもなお、「京師」の二字を頑なに守り続けた。清は天下統一を果たした当初、直ちに応天府南京を廃止して江寧府に改名し、発祥の地である盛京を留都とした。清朝が「北京」の名を国都の名称として引き続き正式に使用するとすれば、盛京は北京よりさらに北に、東にある。加えて明朝が北京を使ったのは、明の洪武帝が元来南京を都としたからであり、永楽帝は北遷に際し父親の制度を廃止することができず、南北相對制を採用したからである。一方を虚都に、もう一方を実都とし、燕王の藩地・北平府を北京順天府としたのであった。清朝が北京の名を踏襲するならば、南京が依然存在することを認めたに等しくなる。様々な政治的影響を考慮し、『詩經・大雅・公劉』に使われている「京師」を採用してまで「北京」という名前を変えたかったのであろう。明朝も京師を使っていたとはいえ、それは北京の別名としての使用であった。清朝は京師を正式名称として使用した。庶民の間では依然として北京・南京の呼称が使われ、なかなか変えられなかったが、お役所もこれには目を瞑るしかなかった。

上述した資料から、「北京」の2文字を合わせてできた地名として、最も古いのは後唐（923 - 936）の北京太原府（現在の山西省太原市西南）であることが分か